みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

10 万年にわたる地球のビーズ文化：民博・特別展『ビーズ：つなぐ・かざる・みせる』からの展望：共同研究：世界のビーズをめぐる人類学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008687

PROJECT

10万年にわたる地球のビーズ文化──民博・特別展『ビーズ──つなぐ・かざる・みせる』からの展望

文
池谷和信

共同研究 ● 世界のビーズをめぐる人類学的研究（2016-2017年度）

ビーズに注目する理由

筆者は、これまでアフリカ大陸を中心として現存する狩猟採集民社会の研究を行ってきたが、なかでも先史時代から現在まで継承されてきた事象に注目をしてきた。1つは、約1万年前の定住狩猟採集民によって始められたとされる農耕や家畜飼育、もう1つはおよそ10万年前にはじめてつくられたとされるビーズである（池谷編 2017）。しかしながら、とりわけ後者の研究では、約10万年のあいだの人類史という時間軸と、ビーズの広がった地球という空間軸の2つの枠組みからの研究がないことが気になっていた。これは、ビーズを研究する学問分野が細分化されているために、世界のビーズの人類史というような大きなテーマへの統合化が遅れていたからである。そこで、今回の共同研究では、①どうして人がビーズを身につけるようになったのか、②現在までの約10万年のあいだ、ビーズはどのように広がったのか、③ビーズの役割にはどのようなものがあるのかなどの問いに答えることをねらいとした。

まず筆者は、共同研究の代表として、人類学を中心にして考古学、歴史学、地理学、経済学、芸術学、服飾学などの研究者が一堂に介して、「ビーズ学」というような新たな学問を構築するなかで、上述した問題の答えを追究できるものと考えた。最初に、ビーズの定義などの用語の統一をはかりながら議論を進め、2年目に展示という形でその研究成果を発表した。それが、2017年3月9日から同年6月6日まで民博で開催された特別展『ビーズ──つなぐ・かざる・みせる』である。以下では、この特別展を企画の出発点からふりかえりながら概要を紹介し、人間にとってビーズとは何かについて考えてみたい。

民博での「フィールドワーク」

民博には、世界中の地域からおよそ34万点の資料が収集・収蔵されているが、いったいビーズがどのくらいあるのかは誰にもわからなかった。それは、本館のデータベースの表記にビーズという用語がほとんど使用されていないからである。筆者および本共同研究では、「様々な素材からなるものとものをつなげたもの」としてビーズを定義しているが、その定義にあてはまるビーズはデータベースではまず、首飾り、ネックレス、頭飾りなどの表記から探すことができる。しかしながら、ビーズは人を飾るだけでなく、ものを飾るためにもつくられてきた。たとえば、仮面の一部に装飾として多数の貝殻を縫い付けているものがある。これらもビーズである。こうして、民博の全資料の3%をしめるおよそ1万2千点がビーズとみなせることがわかった。

首飾りをするカラハリ狩猟民の女性（出所：池谷和信『国家のなかでの狩猟採集民』国立民族学博物館 2002年）。

その後、本館の標本資料係とともに、10回以上のべ25時間ぐらいをかけて館の収蔵庫の隅々までビーズを捜した。そのなかには、筆者が2回にわたって現地で収集をしてきたアフリカのビーズも含まれている。これまで、筆者は新着資料展示やアフリカの常設展示場を新構築するなかで、ビーズを素材、形、役割などの要素に分けながら展示してきた。同時に、『世界のビーズ』（池谷 2001）という解説書を刊行しており、これらも今回の資料選定の際に役に立った。

しかしながら、収蔵庫の「フィールドワーク」からはつぎつぎと新たなこともわかってきた。それは、世界のビーズについての展示を行うためには収集品に非常に大きな地域差があるということである。アフリカ、オセアニア、南アジア（とくにインドのナガランド）、日本のアイヌなどについては、量や質においても豊かだが、期待していたチベットの石や日本の真珠製のものなどは皆無であった。「大村しげコレクション」も「ソウルスタイルコレクション」も、各々すべての所蔵品が保管されていると聞いていたが、首飾りなどは除かれていて館の資料には含まれていなかった。また、衣類収蔵庫には衣類に縫い付けられたビーズ、衣類とともに身につける装身具としてのビーズが収納されていた。

その一方で、民博の研究者が個人的に所有しているビーズも多いこともわかってきた。ビーズは持ち運びが容易であるせいか、フィールドから持ち帰って研究室に置かれているものもあったのである。たとえば、吉岡乾の研究室にはパキスタン北部のカラーシァの頭飾り（2014年収集）があった。これは、類似のものが館にも所蔵されていたが、収集した年代が1979年であり、モチーフの変化をみるのに利用させてもらった。印東道子はオセアニアで収集されたコウモリの歯からつくられた首飾り、野林厚志は台湾で収集されたオオスズメバチの頭からなる首飾りを持っていた。いずれも小さなものだが、そこにはフィールドの人々の思いが詰まっていることを、館の研究者たちは説明してくれた。

このようにして、まずは民博の収蔵品の全容とその限界を明らかにすることによって、世界を対象にした特別展示に何が不足しているのかがみえてきた。とくに必要と思われたのは、チベットの石、古代エジプトのビーズ、日本のビーズバッグ、現代日本のビーズ織りなどである。なかでも、ビーズとファッション、ビーズとアートなどのテーマにかかわる文明のビーズについては、館の所有物には関連する資料がほとんどなかった。ゆえにこれらは神戸ファッション美術館、KOBEとんぼ玉ミュージアムなどから借用することになった。こうして館の研究者や他館の協力を得て、世界のビーズの歴史と多様性を紹介する展示の輪郭ができていったのである。

展示場という空間をつくる（2017 年 4 月、国立民族学博物館特別展示場、池谷和信撮影）。

特別展の空間構成

特別展の企画当初、小さなビーズが多数あっても特別展示場を埋められるのかという疑問の声が聞かれた。確かに、最大のビーズ人像でも高さが 1 m 50 ㎝ぐらいで、大人 1 人分の大きさである。ラピスラズリの石の首飾りになると、直径が 1 ㎜以下のものからなっている。構想中には、京都の百萬遍知恩寺から巨大な数珠を借りることができるかを検討したが、諸般の事情で取りやめることになった。

展示の空間構成は、1 冊の本でいえば章の構成に似ている。そこで、人間にとってビーズとは何かという問題意識にあわせて、展示場の 1 階は「10 万年生きつづけたビーズ」、2 階は「地球のすみずみまで広がったビーズ」というテーマを設定した。そして 1 階は、色・形・大きさを示す導入部から入り、①「素材」、②「歩み」、③「つくる」、④「かざる」、⑤「みせる」というコーナーをつくった。一方、2 階は「ビーズで世界一周」と「グローバル時代のビーズアート」、そして「体験コーナー」の 3 つに分けた。

まず①「素材」では、木の実、草の実、貝、石、動物の骨や歯、ガラス、プラスティックなど、これまで人類が利用したビーズを素材ごとに並べた。ここでは多くの発見があった。たとえば、タカラガイのなかでどうしてキイロタカラガイとハナビラタカラガイが選ばれているのか、南米のアマゾン地域でどうして多様な自然素材が現在でも使われているのかなどである。

その理由として前者に関しては、この 2 種類の貝は安定して大量に供給できる点、後者に関してはアマゾンではガラスビーズが導入されていないので古い形が残っている点などが挙げられる。

②「歩み」では、インダス文明とカーネリアン、エジプト文明とガラス、日本の古墳時代とメノウのように、国家や交易とのかかわりなど、様々な素材のビーズと社会との関係に焦点をあてた。そして、大航海時代に、ベネチア産のガラスビーズが世界的に広がり、はじめてビーズで大陸をこえた人類のつながりができたことも確認できた。

③「つくる」では、人類最初のビーズをつなぐ素材は何かという問題意識から、その 1 つである動物の腱やけずる道具なども展示した。④「かざる」は、ビーズ製品をかざる側面に焦点をあてたコーナーであり、仮面や帽子などを展示した。そして⑤「みせる」では、インドのナガの頭飾り、タイのアカの頭飾りや胸飾り、南スーダンのディンカのコルセット、日本の和服、フランスのオートクルチュールのビーズ刺繍のある衣服など、各地のビーズをつかったものをマネキンに着せて紹介した。このコーナーのねらいはビーズが世界各地の暮らしのなかで多様な社会階層に浸透していったことを認識してもらうことにあった。

2 階は、民博の常設展示場の地域区分に従って、世界を 11 地域に分け、各地のビーズの特徴を分かりやすく紹介することを目的とした。たとえば、オセアニアは「海の資源を中心素材とする世界」、北アメリカは「自然素材からガラスビーズへの転換地域」、ヨーロッパは「世界のガラスビーズの生産拠点」、アフリカは「ガラスビーズの世界最大の消費地」、南アジアは「多様なビーズ文化が根強く生きる世界」、日本は「栄えるビーズと衰えるビーズ」という具合である。

展示場構成をしていくと新たな知見もみえてきた。たとえば日本ではビーズ文化が古代に衰退したあと江戸時代に復活する本州地域と、北海道のように数千年のあいだビーズ（玉）文化が継承されている地域がある。一方、数百年単位で世界全体をふりかえってみると、北海道を除いてほとんどの地域ではビーズ文化は盛衰を繰り返してきた点も明らかになった。

ビーズからみえてくる人類社会

ビーズは、10 万年という長い時間のなかで世界中に広がったものである。各地域でそれぞれ身の回りの資源を利用した独立発生もあったが、ガラスビーズと象牙や羊、ときには奴隷をも交換したような交換財としてのビーズの拡散もあった。ベネチア製のガラスビーズの場合、16 世紀にそれが導入された台湾では自然素材との共存が生きていたり、ほぼ同じ時期に北海道では中国製のガラスビーズがすでに定着していたので導入されなかったことも新たにわかった。これらの違いの背景には、ビーズが単なる美しさを求める装身具としてだけでなく、地域に応じて富の象徴や社会的威信、および集団のアイデンティティを示す社会的役割を持っていたことが関与していたと考えられる。今後は、残りの共同研究期間において、こうして特別展示で明らかになった知見をもとに、グローバル、リージョナル、ローカルという 3 つのスケールを設定して、過去と現在のみならず未来における「ビーズと多様な社会とのかかわり方」を展望していきたい。

【参考文献】

池谷和信 2001『世界のビーズ』大阪：千里文化財団。
池谷和信編 2017『狩猟採集民からみた地球環境史──自然・隣人・文明との共生』東京：東京大学出版会。

いけや かずのぶ

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。人類学・地理学専攻。アフリカを中心に、日本を含むアジア、シベリア（チュコトカ）、アマゾンの狩猟採集文化について研究をしてきた。おもな著書に『人間にとってスイカとは何か』（臨川書店 2014 年）編著に『狩猟採集民からみた地球環境史──自然・隣人・文明との共生』（東京大学出版会 2017 年）など。